

# 第 102 回 集談会

(令和 6 年 6 月 20 日(木) 17:25～)

<座長> 星総合病院 看護部 2UV 病棟  
師長 小山 陽子

## 1. キラリふれあい広場活動報告

○戸崎 亜紀子<sup>1</sup>、甲野藤 彩乃<sup>2</sup>、原 雅幸<sup>2</sup>  
三本木 由香里<sup>3</sup>、廣野 千百合<sup>4</sup>、藤田 真輝<sup>5</sup>  
1:法人在宅事業部、2:星総合病院 総合相談課  
3:同 看護管理室、4:同 心理室、  
5:法人教育研修センター

### 【開催の目的】

キラリふれあい広場は毎週火曜日にメグレズホールホワイエで開催している健康講座の名称である。「病気になってからだけでなく、病気にならないためになる病院、地域から愛され、頼りにされる”おらが病院”」を体現するため平成 27 年より開始した。

### 【内容】

10 分間の健康体操や 30 分の無料健康教室を軸に、月 2 回の認知症カフェも開催、介護・療養相談を行ってきた。新型コロナウイルス流行以前は「あおぞら市」や、管理栄養士による健康メニューの振舞い、社会資源と住民がつながるよう、救急ふれあい広場や郡山市のきらめき出前講座なども活用し、近年は活動意欲や参加の楽しみとなるようスタンプカードを導入するなど工夫を続けている。令和 5 年度は健康教室 47 回開催し 916 名参加し、認知症カフェは 24 回開催し 271 名が参加した。

### 【考察】

この事業により、地域住民や認知症当事者と家族が笑顔で過ごす時間を提供でき、認知症当事者の希望を叶える活動（参加者と職員による外出支援、子供との交流など）ができた。また何気ない会話から療養の相談、制度の相談にもつなげることができている。またあらゆる部門の職員が講師や運営を担う仕組みから、入院だけでは支援しきれない領域に専門性を活かすことにつながっている。

### 【今後に向けて】

次年度 10 年目に向かえるにあたり地域住民のウェルビーイングに一層貢献できるよう内容を工夫し継続していきたい。

## 2. 緩和ケア病棟の 10 年の歩みとこれから

○尾形 育恵<sup>1</sup>

1:星総合病院 看護部 緩和ケア認定看護師

### 【はじめに】

2013 年に新病院の開院と共に郡山市内で 2 番目に開設された緩和ケア病棟も、まる 10 年を迎えた。この 10 年の中で病棟体制の改編や 2018 年、2022 年に行われた診療報酬改定、そしてコロナ禍といった情勢の変化の中で、常に組織や地域に求められる役割を果たそうと今日まで邁進してきた。

### 【主旨】

当院の緩和ケア病棟は 16 床あり、悪性腫瘍患者を対象とし、症状緩和を行い積極的に生きていけるよう患者だけでなくご家族も含め支援している。本来の緩和ケア病棟は、面会制限なく、ラウンジにあるキッチンでご家族が患者さんのために調理し、食欲が低下した中でも慣れ親しんだ味を患者さん自身が目や舌で味わうといったことが行われていた。また月 1 回の季節の催しも、ラウンジでご家族や他患者とともに会食をしながらひと時を過ごす機会となっていた。現在コロナ禍となり制限がある中で、かたちや方法を変えて行われている取り組みや、緩和ケア病棟の質の向上への取り組みなどについて改めて知って頂く機会とした。また今後、緩和ケア病棟が目指す姿について財団関係者だけでなく、地域の病診連携の医療者の方々へも発信し、地域の皆様からこれまで以上に必要とされる病棟であり続けたいと考える。

### 3. 当院の透析患者に対する運動療法チームの 現状と課題について

○清水 照太<sup>1</sup>、橋本 智映子<sup>1</sup>、草野 直樹<sup>1</sup>、  
佐瀬 道郎<sup>2</sup>、半谷 正子<sup>3</sup>、近内 佳子<sup>3</sup>、  
氏家 憲一<sup>4</sup>、飛田 理恵<sup>5</sup>、  
佐久間 裕司<sup>5</sup>、二瓶 健司<sup>5</sup>

1: たむら市民病院 リハビリテーション科、2: 同 診療部、  
3: 同 看護部、4: 同 臨床工学科、  
5: 星総合病院 リハビリテーション科

#### 【はじめに】

当院では透析時運動療法加算の新設前から、理学療法士（PT）が透析患者数名に透析前に運動療法を実施していた。今回、透析患者に対する運動療法チームを結成したため現状と課題を報告する。

#### 【チーム概要】

腎臓リハビリテーションガイドライン講習会を受講した医師 1 名、PT3 名、看護師（Ns）2 名、臨床工学技士（CE）1 名の計 7 名で構成した。

#### 【現状】

運動療法実施の同意を得られた透析患者（60 歳以上かつ SARC-CalF11 点以下）を対象に、透析日に運動療法を実施した。運動療法は主に PT が透析前または透析中に週 2～3 回、3 か月間実施した。3 か月経過後は、Ns と CE 主体の運動療法へ移行した。また、身体機能評価（握力、SPPB、6 分間歩行）を運動療法開始前と 3 か月経過後時に実施した。

#### 【結果】

2022 年 12 月から 1 年間で 14 名の患者（平均 71.8 歳、男性 5 名、女性 9 名）に有害事象なく、運動療法を実施した。頻度の内訳は、週 2 回が 10 名、週 3 回が 4 名であった。運動開始前の握力の平均値と標準偏差は  $19.7 \pm 6.1$  kg、SPPB  $8.9 \pm 2.9$  点、6 分間歩行距離  $286.3 \pm 94.8$  m であった。3 か月経過後はそれぞれ、 $20.9 \pm 6.5$  kg、 $9.7 \pm 2.7$  点、 $309.6 \pm 100.2$  m であった。3 か月以降の運動頻度は週 1 回程度に減らした。

#### 【課題】

一定の運動処方でも継続的な実施をすることが困難な現状であり、運動療法の標準化と継続性が課題と考えられた。今後、マニュアルや運動療法動画の作成など課題に対応しつつ、持続可能な取り組みをしていきたい。

<座長> 星総合病院 診療部 循環器内科

部長 三橋 武司

### 4. 「看護部倫理カンファレンスファシリテーター 派遣システムの実績と今後の方向性」

○宍戸 晶子<sup>1</sup>、滝澤 礼子<sup>2</sup>、久保木 優佳<sup>3</sup>  
1: 星総合病院看護部 ICU/CCU・HCU 病棟、  
2: 同 看護管理室、3: 法人看護部

#### 【目的】

令和 2 年度より倫理カンファレンスファシリテーター派遣システムを発足させ運用を開始した。看護部で行われている倫理カンファレンスの効果の実施及びスタッフの倫理的感性の醸成に寄与することである。

#### 【方法】

1) 臨床倫理に興味関心が高い看護師 6 名で倫理カンファレンスファシリテーターチームを結成  
2) メンバー及び看護部長と協議し、ファシリテーター派遣システムを構築 3) カンファレンス用紙改定、マニュアル作成 4) 看護部内に派遣システム説明 5) 要請部署へのファシリテート実施 6) 実施後アンケートによるシステムのブラッシュアップ化

#### 【経過】

4 年間で 51 件の派遣依頼があった。テーマとしては「意思決定支援」「身体抑制」「家族対応」「高齢者の終末期医療」「認知症患者への告知」などが多かった。スタッフのもやもや軽減を図ると共にメンバー間でも事例ごとに意見交換を行った。令和 5 年度には次世代育成にも着手し 3 名の新メンバーが加わった。

#### 【考察】

活動を通してみえてきた課題は、①臨床倫理課題に多職種チームで関わることの重要性 ②臨床現場で起こる様々な倫理的課題にタイムリーに関わることの必要性である。

#### 【今後の方向性】

今年度 5 月に多職種による臨床倫理コンサルテーションチーム「リンコンチーム」をキックオフさせた。このリンコンチームが臨床倫理課題にタイムリーに関わり、心理的安全性のもとに、対話し、患者・家族、また医療者にとってより良い医療提供できるよう活動していきたい。

## 5. 転院調整業務効率化への取り組み

～「CAREBOOK」導入の効果～

○甲野藤 彩乃<sup>1</sup>、金澤 麻衣<sup>1</sup>、金澤 花純<sup>1</sup>、  
櫻井 志保<sup>1</sup>、鹿股 夢泉<sup>1</sup>、三枝 友紀乃<sup>1</sup>、  
別府 禎子<sup>1</sup>

1: 星総合病院 入退院支援センター

### 【はじめに】

新型コロナウイルス感染症の5類移行後、急性期病院としてより多くの患者を受け入れるため、効率的な病床運用、退院支援の強化が求められている。

近年、複合的な課題をもつ患者支援が増えており、その中でも転院調整は時間を要する業務である。複数の病院への頻回な電話連絡やFAX送信の煩雑さ、転院調整の進捗状況を把握しにくい等が課題となっていた。そこで令和5年7月より、チャットや一括打診機能によって、業務負担軽減をサポートする入退院支援クラウド「CAREBOOK」を導入したので、効果について報告する。

### 【導入の効果】

CAREBOOK導入にあたり、連携病院にシステム導入の説明会を行い、現在は県中圏域を中心に22病院で導入となった。

①チャット利用や一括打診により、転院調整に係る電話回数は1/3に削減。

②初回打診から転院日までの調整平均日数が12.2日と短縮化。

③打診記録の一覧から進捗管理がしやすくなった。

当院だけでなく、連携病院でも同様のメリットがあったとの回答があり、双方の転院調整業務効率化に一定の効果があったと考えられる。

### 【今後の展望】

事務作業を効率化することで、1人1人の患者家族への支援に注力していきたい。連携病院との繋がりを強化していく必要があり、定期的な意見交換や訪問活動を行い、シームレスな地域連携を目指していきたい。

## 6. 結節性多発動脈炎による難治性下腿

潰瘍に対し、LDLアフェレシスを導入した1例

○高橋 龍平<sup>1</sup>、佐藤 真由<sup>2</sup>、  
越田 亮司<sup>3</sup>、本多 皓<sup>2</sup>

1: 星総合病院 初期臨床研修医、  
2: 同 皮膚科、3: 同 循環器内科

### 【症例】

32歳女性。

【経過】初診6年前、外傷を契機に左第5趾に潰瘍が出現。数ヶ月治癒せず、下腿網状皮斑と新生潰瘍を生じたため、近医皮膚科を受診。血管炎を疑われるも診断がつかず、中等量ステロイド内服にて対応されていた。初診半年前より左足底～足背に複数の潰瘍が新生し、免疫抑制剤内服を追加するも難治。疼痛のため歩行困難となり、精査加療目的に当院を紹介受診した。初診時、両下腿と上腕に網状皮斑を認め、下腿には浸潤をふれる有痛性紅色結節が多発。両側足背・足底・踵部に母指頭大までの潰瘍を認め、足関節痛、両下腿のしびれも伴った。病理組織学的には皮下脂肪組織に壊死性動脈炎を認め、皮膚・関節・神経症状から結節性多発動脈炎と診断した。ステロイド内服（プレドニゾロン60 mg/day）、ステロイドパルス療法、免疫抑制剤内服・点滴、抗血栓療法を行うも潰瘍は拡大傾向。血管造影にて末梢血管の描出不良は認めるも、血管内治療の適応はなかった。そこで、LDLアフェレシスを併用（計17回施行）したところ、潰瘍は徐々に縮小傾向となり、LDLアフェレシス終了4ヶ月後に癒痕治癒した。

【考察】本症は比較的生命予後良好な疾患とされるが、末梢循環障害の強い症例においては足壊疽・指趾壊疽から切断に至った症例も報告される。既存治療抵抗性の症例、血管内・外科的治療が困難な症例については、LDLアフェレシス治療も選択肢となりうると考えた。

### 【特別講演】

〈座長〉星総合病院 診療部 脳神経外科  
部長 小林 亨

### 演題「脳腫瘍の最前線

—覚醒下手術，術中MRIから小児脳腫瘍まで—

福島県立医科大学医学部 脳神経外科学講座  
主任教授 藤井 正純

# 第 29 回 院内学会

(令和 6 年 10 月 24 日 17:40~)

〈 座長 〉 星総合病院 臨床工学科

奈須 利政

## 1. 重度心身障害のある遺伝性乳癌卵巣癌 (HBOC) に対し多職種で臨んだ治療方針の決定 —リンコンチームの支援を受けて—

- 勝部 暢介<sup>1,2</sup>、滝澤 礼子<sup>3,4</sup>、須藤 美月<sup>1,2</sup>、佐藤 文佳<sup>5</sup>、荒瀬 洋子<sup>4,6</sup>、佐藤 亜由美<sup>3</sup>、田村 理沙<sup>3</sup>、渡辺 美喜<sup>3,4</sup>、尾形 育恵<sup>3</sup>、久保木 優佳<sup>3,4</sup>、南 華子<sup>7</sup>、長塚 美樹<sup>4,7</sup>、増山 郁<sup>4,8</sup>、加藤 克彦<sup>9</sup>、野水 整<sup>2,7</sup>  
1: 星総合病院 遺伝カウンセリング科、2: 同 がんの遺伝外来、3: 同 看護部、4: 同 臨床倫理コンサルテーションチーム、5: 同 栄養科、6: 同 心理室、7: 同 診療部 外科、8: 同 診療部 小児科、9: 同 診療部 産婦人科

### 【背景】

遺伝性乳癌卵巣癌 (HBOC) は乳癌や卵巣癌をはじめとするがんの易罹患性症候群である。HBOC は代表的な遺伝性腫瘍の 1 つであり、当院では「がんの遺伝外来」を中心に長年診療に取り組んできた。今回は、臨床倫理コンサルテーションチーム (リンコンチーム) の支援を得ながら多職種で HBOC 患者に対する治療方針の決定に臨んだ経験を報告する。

### 【症例】

35 歳女性。脳性麻痺による重度心身障害のため入所中である。実母、母方伯母、母方祖母が HBOC であり、母と母方伯母は現在も当法人でフォローアップしている。左乳房腫瘍の触知を契機に左乳癌と診断され、実母は当院での治療を希望された。BRCA 遺伝学的検査で HBOC と診断されたため、左乳癌の手術に加え対側乳房と卵管卵巣を予防的に切除する手術が保険診療で実施可能と判明したが、本人の意思が確認できない中での治療方針の決定に難渋した。そこで、リンコンチームからの支援を受け多職種で検討を行い、左乳癌の治療 (乳房切除術+腋窩リンパ節郭清) のみを行う方針を提案することとなった。両親も本方針に納得され、当院にて手術を施行した。

### 【考察】

HBOC に対するリスク低減手術は時に倫理的問題を孕むが、本人の意思が確認できない中での判断は

更に困難を極めた。こういったケースにおけるリンコンチームの支援は非常に有用であり、患者にとって最良・最善と思われる選択を導き出すプロセスにおいて多職種が関わることの意義を感じた 1 例であった。

## 2. 臨床判断能力の「気づき」のトレーニング ～成果と課題～

○横山 律子<sup>1</sup>

1: ポラリス保健看護学院

### 【目的】

臨床判断能力を育成するため、紙上事例を活用し学生の「気づき」に特化したトレーニング教育を実施し、講義の成果と課題を明らかにする。

### 【授業概要】

3 年次前期科目の 2H/8H で実施した。

### 【方法】

2024 年 5 月紙上事例を活用し「気づき」に特化したトレーニング教育を実施し、A 校 3 年生 31 名に「気づき」についてグループワーク、デフリーディング後に Google アンケートを調査対象とした。

### 【結果】

A 校 3 年生 3 グループに分かれて術後 1 時間と 3 時間後にモデル人形を観察した。術後 1 時間では 1G12 名は全身の観察をしながら、見て触れて声を出しながらドレーン類を確認した。頸部に触れた瞬間「あれ汗？」と一人が話すと全員で確認した。弾性ストッキングを脱がせ足背動脈を確認する行動も見られた。2G9 名 3G10 名は全身の観察はできたが、視覚からの判断に留まった。術後 3 時間後は術後出血に気づき確認した。アンケートからモデル人形の変化に気づくことができたと回答が 30 人 (96.8%) であった。

### 【考察】

目に見える物は学習していれば気づくが、見えないものの異常に気づく力は、同じ経験を繰り返すことが必要である。急性期事例を実践に近い場面を作成し、トレーニング学習することで臨場感があり、成果があったと確認できた。その機会を多く経験できる環境を整えていくことが課題と言える。

### 3. 診療放射線技師における業務拡大および タスクシフト/シェア進捗度の検証 ～他地域医療施設との比較から～

○続橋 順市<sup>1</sup>、古川 史花<sup>1</sup>

1:星総合病院 放射線科

#### 【背景】

令和3年に診療放射線技師法が改正され、厚生労働大臣が指定する告示研修を受講した診療放射線技師は、業務範囲項目の拡大が認められている。

また、これらの項目以外にも近年のタスクシフト/シェアの潮流により、診療放射線技師に求められるものは大きくなっている。

#### 【目的】

当院診療放射線技師における業務拡大およびタスクシフト/シェアの進捗度を、他地域の医療施設と比較し検証する事を目的とする。

#### 【方法】

昨年、東北および新潟地域の医療施設を対象に行った、業務拡大およびタスクシフト/シェアの進捗度アンケート調査結果をもとに、当院との進捗度を比較した。

#### 【結果】

アンケート調査においては、各地域より計113(当院含)の医療施設からの回答が得られた。総合的にみると、東北および新潟地域における業務拡大およびタスクシフト/シェアの進捗度は低いものであった。しかしながら、当院においては多くの項目で実施しており、進捗度は高いものであった。

#### 【考察】

当院で行っていない業務範囲拡大の項目の一つとして、CT・MRI・核医学検査における静脈路の確保が挙げられる。その要因には院内事情と法的問題があり、現在の運用に至っている。

#### 【結語】

当院における診療放射線技師の業務拡大およびタスクシフト/シェアの進捗度は、他地域医療施設より高いものであった。

<座長>星総合病院 診療部 小児科部長 増山 郁

### 4. こども事業部看護師とこどもの関わり

○斎藤 綾乃<sup>1</sup>、加藤 洋子<sup>2</sup>、  
大石田 萌<sup>3</sup>、芳賀 美幸<sup>4</sup>

1:こども事業部 星の森保育園、

2:同 ほしのご保育園、

3:同 三春町第1保育所、

4:同 三春町第2保育所

#### 【はじめに】

こども事業部には4名の看護師が所属し、星総合病院が運営管理する5つの保育園・保育所に在籍している。保育園で活動する看護職の実際について報告する。

#### 【活動の実際】

各保育園に1名ずつ配置されている看護師は、日常的な子どもの健康管理、突発的な怪我の処置や体調不良時の対応、園全体の感染管理等を主な業務としている。視覚障害や聴力障害、てんかん、心疾患、指定難病等基礎疾患のある子どもを受け入れる場合の環境調整や在園時の内服管理を保育士と連携し行う。近年、神経発達症(ASD、ADHD、LD等)の園児も多く、特性に合った関わりが求められる。その中で、多彩な医療専門職がいる当法人の強みを生かしSTラウンドや心理士相談等対象に必要な専門職へ繋げ、園児個々に合わせた対応となるよう関わっている。保護者支援が必要な家庭や虐待疑いのある家庭に対しては、行政や児童家庭支援センター等と連携し子どもの安全と保護者の支援・指導を行う。また、病児・病後児保育や医療的ケア児の受け入れも行い、対象に必要な保育・ケアを看護師間・保育士で共有・連携し実施している。

#### 【今後の課題と展望】

こども事業部は複合施設新設に伴い、新たな保育園、乳児院事業に取り組む。これまで以上に地域との関わりを密に地域全体で子育てをする環境調整と園児個々の特性に合った保育、子どもたちの主体性を伸ばせる保育となるよう多職種と協働し尽力していきたい。

## 5. RS ウイルス下気道炎の小児例

○工藤 健<sup>1</sup>、増山 郁<sup>2</sup>、佐川 有理子<sup>2</sup>、  
石綿 翔<sup>2</sup>、嶋 恵理子<sup>2</sup>、佐久間 弘子<sup>2</sup>、  
加藤 一夫<sup>2</sup>

1:星総合病院初期臨床研修医、2:同小児科

### 【はじめに】

RS ウイルスは出生後早期から感染し、2歳までにほぼ100%が感染する、本邦において疾病負担の大きい感染症である。RS ウイルスの流行期に小児科で研修を行い、RS ウイルス下気道炎の小児例を経験した。

### 【症例の経過】

症例は1歳6か月女児。入院4日前に発熱、鼻汁、咳嗽などの上気道症状で発症した。その後、経口摂取不良となり当院小児科を受診した。受診時、37.7℃の発熱、頻呼吸、呼気延長、軽度の陥没呼吸があり、胸部聴診にて湿性ラ音を聴取した。鼻汁RSウイルス抗原検査が陽性であり、RSウイルス下気道炎の診断で入院した。入院後は酸素、ステロイド剤、抗菌薬、β刺激薬の吸入等の治療により症状は改善し、入院4日目に退院した。

### 【考察・まとめ】

RSウイルス感染症は上気道炎で発症し数日で下気道炎に進展するのが典型的な経過である。治療法は基本的には対症療法で、経口摂取不良に対する輸液、呼吸苦に対する酸素療法が主となる。病状に応じて二次細菌感染を予防するために抗菌薬、喘鳴に対して気道炎症を抑制するためにステロイド剤、β刺激薬の吸入が考慮される。本症例の経過は幼児のRSウイルス感染症の経過として典型的なものであった。RSウイルス感染症の重症化予防には、近年新たな抗RSウイルス抗体製剤や妊婦ワクチンが発売となり、RSウイルス感染症による疾病負担の軽減が期待される。

## 6. 当院におけるRSウイルス診療について

○増山 郁<sup>1</sup>

1:星総合病院 小児科

### 【要旨】

RSウイルス（以下RSV）は子どもの感染症として知られているが、その後も生涯にわたって何度も感染と発症を繰り返す。そのため、乳幼児だけでなく、成人、特に高齢者にも影響をおよぼす可能性がある。小児RSV感染症の治療は対症療法が主であり、重症化リスクのある乳幼児のみ、重症化予防のために抗RSV抗体製剤を投与することができる。2024年は、RSVに対する成人用ワクチン、妊婦用母子免疫ワクチン、新世代の抗RSV抗体製剤が立て続けに発売となり、予防および重症化抑制に関して、大きなターニングポイントとなる年である。

福島県では小児における小児RSV感染症の流行動態の把握と解析を行っている。県全体の小児RSV感染入院児の約1割が当院に入院する。入院は生後12ヵ月齢未満の乳児が約半数を占めており、特に既往のない乳児が殆どである。治療には酸素療法・ハイフローネイザルカニューラの補助を要することも稀ではない。

福島県における母子の血清疫学データでは、正期産でも十分な抗RSV中和抗体能を有していない母体がいることが予想される。母子間では中和抗体が移行しており、今後、母子免疫ワクチンの普及に伴い、乳児の入院が減ることが期待できる。